

●コレクション・データ

時代 弥生時代 前期
調査 唐古・鍵遺跡 第53次調査
発見年 1993年
大きさ 直径12.8cm・厚さ1.5cm
展示位置 第1室・「交流と戦い」



唐古・鍵考古学ミュージアム

KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション 46

縄文的色彩をもつ
環状石斧

今回は、「環状石斧」と呼ばれる石器を紹介します。この石器は、円盤状の中心部に円孔をもつ磨製石器で、周縁部は研磨され刃部が付けられています。ほぼ半分に分かれています。中央の円孔は孔径にあった円柱状の石錐によって両面からあけられています。

中央の円孔に棍棒を通し、使用したと考えられますが、具体的な用途に関しては、東南アジアの民俗例から武器説、権力者の儀仗説や土掘り用の農具説とさまざまに決着していません。

このような環状石斧は、約8000年前の縄文時代早期、北海道・東北北部・九州に出現しますが、その後は縄文時代晩期の中部高地や飛騨地域にみられます。また、弥生時代中期や中国東北部や朝鮮半島にもありますが、その系譜的な関係はわかりません。

唐古・鍵遺跡の環状石斧は、円孔の周辺に漆が残ることから、実用より装飾的な遺物と思

われます。祭祀用の儀仗として使われたのかもしれない。唐古・鍵遺跡ではこの環状石斧以外に、周縁部に切込みがある花弁形をした多頭石斧も出土しています。これら唐古・鍵遺跡の石器は、弥生時代前期のもので、時期的・形態的に縄文時代晩期の中部高地や飛騨地域のものにちかいです。

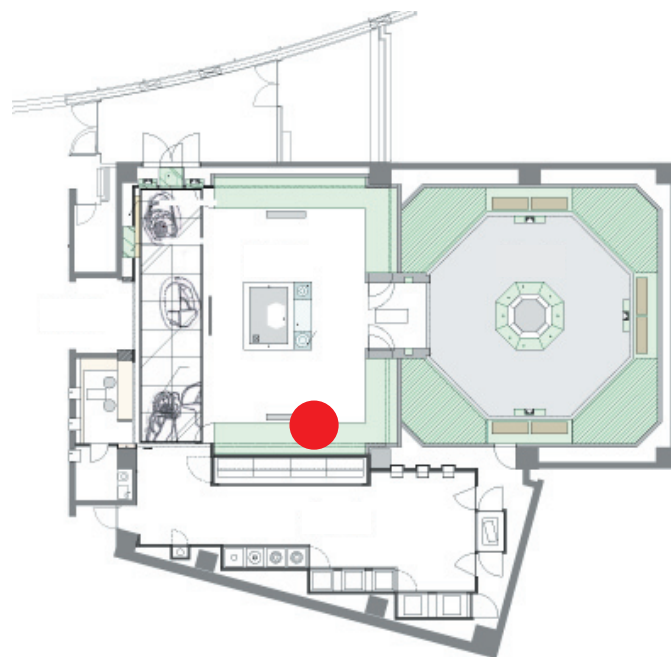
このことは、唐古・鍵遺跡の環状石斧がそれら地域からもたらされた、あるいは影響を受けた遺物とみなすことができるでしょう。

縄文時代後・晩期には、気候の寒冷化に伴い、東日本の縄文文化が近畿から九州に及びます。また、地理的には唐古・鍵遺跡は、西日本と東日本の接点にあ

っています。今回の環状石斧は、縄文文化との繋がりが地域的な影響を示している遺物で、唐古・鍵遺跡に内在する弥生の基層文化を考える上で貴重な資料になります。

唐古・鍵考古学
ミュージアム
【 ☪ 34・7100】

開館時間 午前9時～午後5時（月曜は休館）
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金/15歳以下は無料）
▼大人 200円（150円）
▼高校生・大学生 100円（50円）



ミュージアム上面図と展示位置